Chapter 14 : **画面の影たち Part 1**

アブソルは洞窟型ゲーミングチェアにひとり腰掛け、埃まみれのポケギアをカタカタ叩いていた。彼の目はくぼみ、表情は疲れ果てていた。今週に入って四度目の３つ星ビードルを引き当てたところだった。

「たった一つでいい…五つ星を…」と彼は囁き、偽りの希望にすがっていた。

金はない。

暇だ。

そして何よりも、仕方なく完全無料プレイだ。

突然、画面にパーティ招待が現れた。

| パーティ招待：fireeevee  
| 「おいアブソル！夜更けのカントリートリオで対戦しようぜ！光るスキン自慢もあるぞ！」

アブソルは凍りついた。

fireeevee。

その名。呪われた名。

フレアオンのオンライン名だ。あのフレアオンはかつて六連続で超レア衣装を引き当てたのに、アブソルは背景ステッカー一枚で軽い鬱になった。

彼の目がぴくりと痙攣した。

しかし、他にやることはなかった。

彼は承諾した。

後に、ゲームロビーで…

フレアオンは新しい火の侍鎧を見せびらかし、炎の尾の物理演算も完璧だった。

シャワーズはキラキラの水色プリンセスドレスをくるくる回し、雨の演出付き。

サンダースは声優付きのサイバーサンダー忍者衣装で、やる気10％アップのボーナス付きだ。

アブソルは…デフォルトの無料プレイ用鎧に、「Early Beta Tester」と書かれたヒビ割れた角のコスメを付けて登場した。

「なあアブソル」とフレアオンは気軽に言った。「前はけっこう課金してなかったか？」

アブソルは虚空を見つめる。

「もう違う。俺は色々見たんだ。ひどいガチャ。限定トラップ。嘘のレートアップ。」

試合が始まった。

それでも彼はチームを背負った。

試合後…

エーフィがスナックを持って現れ、息子のゲーム仲間に誇りを持っていた。

アブソルは深く疲れた目で彼女を見た。

「エーフィ」と彼は真剣な声で言った。「フレアオンがどれだけ課金しているか監視するべきだ。このゲーム…もう楽しむためじゃない。財布狙いだ。」

エーフィは瞬きをした。「でも、スキンだけでしょ？」

アブソルはポケデックスを取り出し、『＄2000スキンコレクション - 後悔編』の画像をスクロールした。

「彼を俺みたいにさせるな」と警告した。「ガチャは単なるギャンブルじゃない。スパークル付きの感情戦争だ。」

エーフィは肩に手を置いた。

「ありがとう、アブソル。そこまで深刻だとは思わなかった。」

アブソルは厳かにうなずき、十回目の尾のコスメで笑うフレアオンを見つめた。

「…深すぎる。」